



愛光NEWS

2025年12月

2026(令和8)年1月26日発行

(編集) 愛光本部

(TEL) 043-484-6391

(HP) <https://www.rc-aikoh.or.jp/>

2025年を締めくくる12月、愛光では「第13回職員実践発表会」を開催いたしました。日々の業務の中での気づきや改善の成果を職員で共有しました。今回は特に「意思決定支援」をテーマに、ご本人の想いに誠実に向き合った実践が最優秀賞に輝きました。

また各現場では利用者の笑顔あふれる年末のひとときが流れました。12月は忘年会や冬至、大晦日の行事食など、利用者と職員が共に一年を振り返り、温かな気持ちで新年を待つ様子が伺えました。

地域の皆様に支えられ、無事に一年を締めくくれることに感謝し、これからも地域に開かれた法人として歩み続けてまいります。

□事業経過など(2025.12.1~)

2	火	業務執行会議/山王小福祉学習
5	金	職員実践発表会
7	日	評議員会
8	月	メンター情報交換会
10	水	コ・ヒューマントレーニング
12	金	5S研修
16	火	佐倉圏域事業部実績会議/試用期間終了面接
17	水	地域食堂ともいき
23	火	後援会運営委員会
24	水	障害者支援事業部実績会議/地域福祉事業部実績会議/財務プロジェクト/感染症対策研修
25	木	高齢者福祉事業部実績会議/本部実績会議
26	金	法人挨拶回り/内定者懇親会

■月報から

□ 最優秀賞はリホープ～意思決定支援 これでよかったですかな？～（本部）

12月5日（金）「第13回職員実践発表会」が開催されました。日々の業務における気づきや改善など共有される貴重な場となりました。厳正なる審査の結果、今年度の最優秀賞には、リホープの発表「意思決定支援 これでよかったですかな？～Mさんのお看取りを通して～」が選ばれました。意思決定支援というテーマに対し、誠実に向き合った姿勢とお看取りのエピソードは、聞く人の胸を打つ素晴らしい発表でした。（総務課長 宮本 典昭）

□ 第三者委員との懇談会（ルミエール）

21日、おひさまにて、第三者委員である聖徳大学の向井智之先生と利用者家族による懇談会が行われた。今回は事前に「地域移行」と「延命」をテーマとした資料を提供し、第三者委員が家族（後見人）から意見を聴取する形をとったところ、多くの意見が出された。

ルミエールでは、毎年担当者会議の際に地域移行の意思確認を行っており、現時点では100%の利用者が施設生活を希望している。しかし後見人からは、もし利用者に選択肢があるのなら、情報を提供した上で自ら考えられるようにしたいとの意見があった。

施設側からは、昨今地域移行の話題が多く出ているが、これは決して利用者を施設から追い出すためのものではないことを説明した。全ての障害者に対し、施設・地域を含めた多様な生活の選択肢があり、それの中から幸せな生活を見つけて選ぶ権利があることを伝え、理解を得た。

対話の中では、「施設を探し歩いてようやくルミエールに辿り着いた。今も職員の支援に感謝しており、これからもずっと利用していきたい」という声も寄せられ、素直に喜ばしい思いであった。利用者の将来の選択肢が広がる時代であるが、施設側も利用者から求められる立場でありたいと強く実感する機会となった。（ルミエール課長 原 宏之）

□ 利用者年末の帰省（めいわ）

コロナ禍においては、年末年始の帰省を遠慮いただいたが、2024年には久しぶりに帰省が可能となり、今年はさらに多くの利用者が家族のもとへ帰省した。

親の高齢化に伴い、近年は兄弟の支援による帰省が増えてきている。利用者にとって、家族と過ごす時間は大きな楽しみであり、かけがえのない大切な機会である。

今後も家族の支援を受けながら帰省を続けていくためには、日頃から健康や体力を維持していくことが重要となる。職員一同、各職種が連携しながら、利用者の生活と健康を支えていきたいと考えている。（めいわ課長 日野 史生）

□ 思い出の地をめぐる1泊旅行（リホープ）

12月上旬、入居者1名とともに県内での1泊旅行を実施した。当初は9月に箱根旅行を計画していたが、体調不良による1ヶ月の入院を経て体力低下が見られたため、安全面を考慮し、行き先を県内に変更したものである。ご本人から「お墓参りをしたい」との強い希望があり、これを中心に、ゆかりのある土地を巡る行程とした。

当日は、親戚の案内のともご両親が眠るお墓を訪れ、手を合わせながら思い出を語られる場面が見られた。友人や知人の話、若い頃の出来事などを懐かしむ様子があり、「最後まで愛光で過ごしたいなあ」との言葉も聞かれた。これまでの人生やこれからを

静かに振り返る時間となったことがうかがえる。

昼食や宿泊先での食事では、以前から希望していた食べ物を楽しむことができ、「こんな贅沢をしていいのかな」と笑顔を見せられる場面もあった。よく利用していた佐原駅周辺を散策し、街並みを眺めながら当時の思い出を語られた。「駅の左側に交番ないかなあ。若い頃はいろいろ迷惑をかけ、ここにも世話になった」「デパートのせいみや、まだあるのかなあ」といった言葉から、生活史に根ざした語りが自然と引き出されていた。

宿泊先では大浴場に入ることもでき、温泉を楽しまれた。「外に出るといいことがある」と穏やかな表情で話されていた。旅行全体を通して体調は安定しており、無理のない行程の中で、安心して過ごすことができた。

帰所後には、「お墓参りができるよかったです」「知り合いの近況を知れてうれしかった」「また来られるだろうか」といった前向きな言葉が聞かれた。体調面への配慮が必要な状況ではあったが、結果として普段以上に表情や発言が豊かになり、生活意欲の高まりが感じられるような旅行となつたのである。

今回の取り組みは、単なる外出や余暇支援にとどまらず、本人の人生や価値観に寄り添い、これまで大切にしてきた「思い出」や「つながり」を再確認する機会となつた。今後も体調や状況を踏まえながら、本人の思いを尊重した支援の在り方を検討していく考えである。

(リホープ副施設長 麻生 知明)

□ 今年の余暇活動の締めくくりは！（根郷通所センター）

今年度は、余暇の拡充を図るべく、さまざまな余暇活動を行つてきたが、その締めくくりとして、忘年会を開催した。コロナ禍以降、全員で外出して食事をする機会はなかつたが、今回は久しぶりに全員そろつての外食であった。

宴会場までは店の送迎車で送り迎えがあり、日常を離れた特別な雰囲気の中で、ちょっとした旅行気分を味わうことができたようである。提供された料理はいずれも美味しく好評であった。笑顔あふれるひとときとなり、本年の余暇活動を締めくくるにふさわしい、穏やかで心地よい時間となつた。

(根郷通所センター所長 菊地 晓生)

□ 職場が明るくなりました。（佐倉市よもぎの園）

施設修繕の一環として、館内の蛍光灯がLED照明へと全交換された（佐倉市のESCO事業において、よもぎの園が対象となったものである）。工期は約5日間であったが、作業室や食堂など日中の活動場所については閉所日に実施されるなど、利用者への影響を最小限に留める配慮がなされ、非常に助かった。

これまで、照明器具自体の故障により点灯しない箇所が多くあつたため、照明を点けた際の明るさに皆一様に驚いていた。この明るさにはいまだに慣れてはいないものの、本来はこの明るさが普通なのである。

また、園庭（グラウンド）のアスファルト工事も同時に開始され、年明け中旬には完成する予定である。この間、職員の自家用車等の駐車スペースが限られてしまい多少の難儀はあるが、より良い環境に生まれ変わる前のひと時の辛抱であると考えたい。

2026年は整った環境の中でスタートを切ることができる。職場環境が明るくなるのは照明だけでなく、職員や利用者が明るく前向きに活動できる環境づくりを目指し、より一層努力していく所存である。

(よもぎの園 近藤 真一)

□ グループホーム見学会（ワークショップかぶらぎ）

宮前の家が運営を開始し、事業部に2つの異なるタイプのグループホームを持つようになった。この機会に、かぶらぎの利用者で将来的にグループホームでの暮らしを視野に入れている人を対象として、27日（土）にジョーの家（アパート型）と宮前の家（シェアハウス型）の両方を見ることができる「グループホーム見学会」を実施した。

アパート型は基本的に静かで、個別性の高い暮らしができる反面、孤立感も感じてしまうかもしれない。シェアハウス型は、一人ではないと思える他者との距離感が得られる暮らしだが、反面、風呂や洗濯機などを他者と共に用する必要がある。

それぞれの特徴を捉えつつ、自分はどちらの暮らしが合うのか検討できる機会となった。かぶらぎの利用者は総じて慎重な人が多いため、このような機会を通じて少しづつイメージを形成し、決断の機会には自分に合った納得の決断ができるよう下地作りを進めている。

（ワークショップかぶらぎ 宮部 和樹）

□ 自立した生活を目指して、支援のシフトチェンジ（宮前の家）

11月に体験利用を行っていた1名については、残念ながら入居辞退となった。家族からは、本人が将来を見通した判断ができなかったことに対し、落胆の声も聞かれた。12月には山王の家・ジョーの家から2名を受け入れ、計9名での生活がスタートした。新入居者は当初、ルールの違いに戸惑う様子も見られたが、現在は宮前の家の生活に馴染んでいる。11月から継続して入居されている方々も、職員による細やかな「気づき」に基づいた支援により、安定した日常生活を送っている。

個別支援計画において「より自立を目指した生活」を目標に掲げる入居者が多く、支援の質を一段階引き上げる必要がある。単に「困りごとに気づく」だけでなく、気づいた上で本人が「できる」ようになるための関わりが必要だ。職員にとっては根気のいる関わりとなるが、入居者の将来を見据え、自立支援を形にしていきたい。支援以外にもまだ課題が多いが、引き続きチーム一丸となって取り組んでいく。

（宮前の家 高橋 健）

□ 将来を考えるきっかけに…(アシスト)

12/21（日）にイオンタウンユーカリが丘で、佐倉市成年後見支援センターが主催する市民向け講演会に事例発表者として登壇した。内容は「将来に備えて今から出来ること」をテーマに、成年後見制度や相続についての問題があつた事例を出し、その事例の中で事前に必要だったことや、やっておけば良かったことなどを、司法書士の常木先生が事例提供者や会場の参加者に解説していくという形で行われた。参加者の中には、障害を持つ方のご家族もいたと聞いている。私が関わるケースの中で、成年後見制度の必要性は理解していても「いつ手続きするか」のタイミングが図れない方や、制度を正確に理解していないまま拒否感を持っている方も多く見られる。今回のような制度を知る機会があることは非常に貴重であり、将来を考えるきっかけになってくれればと願っている。

（アシスト 小平 和俊）

□ 共生型ご利用者、デイに嵌りました（はちす苑）

ダウン症と若年性アルツハイマー型認知症のある新規利用者。主介護者の父と二人暮らしで、長年、障害福祉サービス等を利用せずに在宅で生活してきた。昨年末、てんかん発作で救急搬送されたことを機に、今年8月よりめいわの生活介護を開始した。最近になり、自宅

での入浴が困難になってきたことから、はちす苑のデイサービスの利用を開始した。

当初は入浴目的の利用であり、自宅では日中に横になって過ごすことが多いことから、臥床時間を設けるよう依頼があった。しかし、本人が様々な活動を大変喜んでおり、自宅での姿勢が良くなり発語が増え、上機嫌で笑顔が増えたと父親より感謝の言葉をいただいた。

2010年に母親が亡くなるまで、本人は母と二人暮らしであり、父親は単身赴任であった。母の死後、父も定年を迎えたことで父子二人の暮らしとなった。父親は長年自宅で過ごす本人の姿を見てきたため、「誰かが付いていないと何もできない」と思い込んでいる様子であったが、この変化には本当に喜んでいる様子である。

父と本人が過ごした十数年間、本人のためには日中の活動ができる環境が望ましかったとは考える。しかし、母親の後を継いで本人に精一杯の愛情を注いだ父親を責めることなどできるはずはなく、今後もデイサービスにおいて本人の笑顔が続くことを願っている。

(はちす苑課長 桐 直芳)

□ 介護者教室「糖尿病とフットケア～足のトラブルチェック方法～」

(佐倉市南部地域包括支援センター)

10日（水）、聖隸佐倉市民病院の糖尿病看護特定認定看護師である高橋氏を講師に迎え、介護者教室を開催した。参加者は19名。糖尿病の病態から合併症まで、非常に分かりやすい講話であった。

糖尿病の合併症には神経障害や網膜症、心疾患や脳卒中、壊疽など重大なものが多くあるが、今回のテーマは「フットケア」であり、糖尿病患者の足のトラブルについて詳しい説明がなされた。足の病変は他の慢性合併症よりも進行が早く、その誘因の第1位が「靴擦れ」という身近なものであることに、参加者全員が驚いていた。毎日の足のチェック方法や靴選びのポイントなどの教示を受け、最後は参加者の足の状態チェックと質疑応答の時間とした。参加者は熱心な方が多く、質問が多数飛び交った。足の状態チェックでは、講師が参加者の足を見て回り、爪の切り方やケアの方法について個別にアドバイスを得ることができた。

参加者からは「とても楽しく糖尿病を知ることができた」「シリーズ化して、より詳しく糖尿病を知りたい」との感想が寄せられ、大盛況のうちに終了した。今後も地域の方に興味を持ってもらえるようなテーマや内容を、来年度に向けて計画していく方針である。

(佐倉市南部地域包括支援センター 森 由美子)

□ クリスマスシーズン到来（佐倉市南部児童センター）

一年を通して、クリスマスほど盛り上がるイベントはない。今年も、クリスマス足形アート、ゆりかごタイムクリスマス会（0歳児親子対象）、ひよこタイムクリスマス会（乳幼児親子対象）、小学生対象のクリスマスジャンケン大会など、さまざまなイベントを開催した。どの催しも予想を上回る来館者があり、大盛況であった。

特に、ひよこタイムのクリスマス会には過去最高となる140人が参加した。「南部児童センターのクリスマス会は予約なしで来られるから」といった声もちらほら聞かれ、人気の高さがうかがえた。他施設では完全予約制で開催しているところが多いようだが、当センターでは施設の広さが確保されているため、予約なしで実施できている。多くの親子が気軽に参加できるイベントを開催できることを、職員一同とても嬉しく思う。

クリスマス会の内容は、マジックやハンドベルなど、みんなが楽しめる企画を準備した。

しかし、当児童センター自慢のサンタクロースが登場すると、それまでの企画はまるで前座であったかのように、会場の注目は一気にサンタに集まった。以前はサンタの負担を考え、個別撮影会は実施していなかった。しかし、コロナ禍で入場制限を行っていた時期から個別撮影会を始めたこともあり、今年も実施した。

すると予想以上の長蛇の列ができ、混雑を避けて他の部屋で遊びながら順番を待つ親子の姿も見られた。この様子では、来年は撮影会の実施が難しいのではないかとも考えた。しかし、嬉しそうに列に並ぶ親子の姿を見ていると、むしろ撮影会こそがメインイベントでも良いのではないかと感じた。サンタにそのことを尋ねたところ、「大丈夫だよ」との返事が返ってきた。ニーズはそこにあるのかもしれない。来年に繋げていきたい。

(佐倉市南部児童センター 吉田 知加子)

□ 防衛隊メンバー募集（学童保育所）

年生の女児から『佐倉市防衛隊』に入らないかとお誘いを受けた。ぜひ入隊させてほしいと話を聞いてみると、クレヨンしんちゃんに出てくる『春日部防衛隊』のようにみんなを守りたいが、メンバーがまだ4人しかいないとのことであった。ポスターを書いて皆に呼びかけてみるのはどうかと提案すると、早速女児はポスターを書き始めた。

ポスターの内容は…

さくらぼうえいたいメンバーぼしゅうしています

こまつたとき、ともだちがいないときは、まもりますメンバーにはいりたいひとはなまえをかいてね

という内容であった。ポスターを貼ると、周囲の子どもたちがすぐに反応し、「なに？ なに？」 「入る！」 「私も！」 と、ポスターには隊員の名前がどんどん増えていった。みんなのために…と1人の女児が始めたことが、今では、名の大きな隊となった。子どもたちの優しい気持ちの輪が広がる瞬間を目の当たりにして、心が温かくなかった。

(学童保育所 平野 美幸)

□ ボランティア講座の開催（佐倉市南部地域福祉センター）

12月6日（土）、当センター主催のボランティア講座を開催した。講師に成田赤十字病院の看護師服部信氏を迎え、演題は「心にゆとりを持つ介護」であった。主にケアの場で穏やかな関係を築くための「感情との付き合い方」を多く学んだ。

講師からは、介護にあたり、相手の心の状態について「その人にとっては全部正解」「人によって程度は異なる」「時代によって変わる」「立場によって変わる」「なにかのきっかけで人は変わる」ことを理解するのが大切であると学んだ。また、「アンガーマネジメント」の講義では、人の怒りのピークは6秒であると学んだ。6秒待って深呼吸し、自分自身も冷静になるなど、人とのかかわりの中でこれらのキーワードを思い出し実践しながら、心にゆとりを持てるようになりたいと考える。（佐倉市南部地域福祉センター 青山 秀人）